

令和4年度(2022年度)第1回宗谷圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会議事録

- 1 日 時 令和4年(2022年)7月1日(金) 13:30~15:10
- 2 場 所 宗谷合同庁舎別館(保健所)2階6号会議室及びオンライン(北海道Web会議システム)
- 3 出席者 別添「出席者名簿」のとおり
- 4 議 題 別添「次第」のとおり
- 5 資 料 別添のとおり
- 6 挨拶及び出席者紹介

(1) 挨拶

吉良社会福祉課長より開会の挨拶を行った。

(2) 出席者紹介

出席者がそれぞれ自己紹介を行った。

7 議事

(1) 説明事項

説明事項(1)の、宗谷圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会の概要について、資料1のとおり事務局より説明を行った。

(2) 報告・協議事項

報告・協議事項(1)の、令和3年度(2021年度)活動報告について、資料2のとおり事務局より説明を行った。

(3) 報告・協議事項

報告・協議事項(2)の、地域課題の設定について、推進員より提案を行った。

〈原田推進員〉

昨年度の地域課題3つを継続するということで、まずはいいと思う。

この順番だけれども、何が一番大事かといったら、3番目の「障がい(児)者と地域住民の相互理解」があれば、1番目2番目は、もっとスムーズにいくのではないだろうかと考えた。

地域住民の相互理解、ここをまず大前提として考え、そして、「就労支援」「相談支援体制」に取り組んでいく考え方はどうかと私は思うが、この辺についてご意見をいただければと思う。

〈千葉委員〉

昨今、年金が下がったとか、食料品が高騰しているとか、情勢がこの2~3年でめまぐるしく変わっている。(障がい福祉)サービスを利用している方も、そういった不安や心配がたくさんあって困っている状況。

相互理解も、コロナの影響でイベント参加とかができない状況があつて、障がい者の働いている様子などが、クローズされている。

そこを、アフターコロナとして、障がいを持った人たちと、それに関わる自分たちがどう考えていくかという課題になると思う。

なので、(地域)課題は、そのとおりでお願いしたい。

〈原田推進員〉

地域課題設定は、私がお話しした、順番が変わるという形でいいととらえてよろしいか。

〈内田委員〉

千葉委員が言われたことは、もっともだと思う。

今は戦争のこともあつて、宗谷地域は、根室と同じくロシアに近いということで、影響を受けやすい地域と思う。

障がいのある方たちの多くは、医療とか、この管内の中心稚内市や名寄市に依存度が高いけれども、これらの都市間の移動であるとか、インフラの関係でいくと、バスの本数が減ったり、JR廃線とかで、いろいろなところに影響が出ていると思う。

そんな中で、障がいのある当事者や家族が暮らしやすくしていくための方策は、やはり行政と民間とでやっていかなければならないと思う。

ひとつ提案したいのは、事業所としてはものづくりをして、障がい者就労で働いてる人もいて、そういった就労支援、就労移行の充実は図られてきていると思う。

一方で、生活全般を見ると、医療の充実とか移動手段とか、オンライン受診に関する障がいのある人たちへのアシスト、この部分を、もう少し融通がきくような調整だとか医療側への訴えかけということも、福祉の現場では声が出ている。

実際、物理的な距離がある地域性だからこそ、そういった情報インフラを活用して、障がいのある方たちを守っていくことも、必要なではないかと思っている。

〈原田推進員〉

この委員会を含めて、今後考えていく課題かなと思う。

地域課題についてはこの3つで、順番は、3、1、2という形でおさめたいと思うが、他の委員の方もよろしいか。

〈各委員〉

了解した。

(4) 報告・協議事項

報告・協議事項(3)の、地域課題解決に向けた取り組みについて、資料3のとおり事務局より説明を行った。

〈原田推進員〉

千葉委員や内田委員からのお話をここに盛り込むことも含めて、この話を進めていければと思う。

昨年度を踏襲するという形の案になっているけれども、先ほどのご意見も含めて、もっとこんなことをした方が良く、できるのであればこうした方が良く、という部分があれば、今ご意見をいただければと思う。

〈鈴木委員〉

取り組み実施の(3)番の他の団体が開催するイベントで啓発事業とあるが、今の時点で何か具体的なイベントがあるのか教えていただきたい。

まだまだコロナの収束には至っていないけれども、世の中は変わっていて、イベントとか祭りとか、できるような状況になってきているけれども、以前の委員会で、千葉委員だったと思うが、コロナがなくなったからといって、通常の生活には戻るのは時間がかかるのではないかという話があって、今ちょっとだけ緩和状況、緩和傾向にある中で、就労施設で働いてる人とか、学校に通われている人とかに変化は見られてるのか、私は直接障がい者の方と関わる機会が本当に少なく勉強不足だけれども、その辺が気になっている。

〈大橋主査〉

具体的なイベントは、正直言ってつかんでいない。

これに関しては、委員さんの方が情報が早いと思われるので、こういうイベントがあるとか、そこに入っていき余地があるかもしれないとか、情報があったら、ぜひお寄せいただきたいと思う。

〈内田委員〉

管内で障がいがある方たちのイベントとかPRとかする際、情報は事業所間で入ってくる人が多いけれど、相談支援事業所でも結構情報が集まっているような気がする。

例えば、上川圏域はメーリングリストを作って、事業所間と相談支援事業所間で、研修会

とかイベントとかの情報を相互交換している。

宗谷で、圏域センター（宗谷圏域障害者総合相談支援センター）とかで、児の方も含めてそういうフレームができないものか。

〈黒川コーディネーター〉

確かに、上川の圏域センターは長年メーリングリストを作成されており、研修の案内であるとか、告知したいイベント等について集約して、みなさんと共有できるような環境を作られている。

こちらのほうとしては、現状まだそういった体制作りは取り組めていないけれども、今後については検討はしていきたいと考えている。

また、各種研修イベント等について、長年、上川、留萌と三圏域で合同で開催している成果があり、そういった研修の発展もちろん、イベント等の開催についても、随時委員会も含めて周知していきたいと考えている。

〈原田推進員〉

それぞれの施設、事業所、相談支援事業所等に流れている部分を、この委員会にも流していただき、我々委員等にも連絡いただければと思う。

〈千葉委員〉

昨年、障がいを持つ人たちや事業所には、アフターコロナ後の体制、元に戻る、明日から普通どおりというのは、短期間では厳しいのではないかという話をした。

稚内の北門神社祭とかイベントが再開されている地域があり、逆に幌延町とか豊富町はお祭りの自粛で、それは各市町村や担当者の考えだとは思いますが、コロナの予防は大事、でも地域参加も大事ということで、関係者は四苦八苦されていると思う。

ナイスハートネットの北海道のアリオの開業が再開された現状を見ると、アフターコロナの状況に近づいているような感じはしている。

最近、コロナの影響で、札幌とかの研修会に参加していないが、全道的にどうなっているのか黒川コーディネーターにお聞きしたい。

〈黒川コーディネーター〉

研修のお手伝いをして把握している状況としては、完全にオンライン対応というのが定着している。

集まっての、顔を合わせたの関係作りや協議を行いたいという要望もあって、集合とオンラインを組み合わせたハイブリッドもある。

そのような開催方法の工夫はしているけれども、まずは感染拡大防止の観点が今のところは重視されているという印象はもっている。

〈原田推進員〉

この取り組み案に関しては、今年度はこのような形でいくということによろしいか。

この取り組み案を、（案）を消して取り組みという形でいきたいと思う。

〈池田委員〉

昨年度の委員会では、2月に公開したホームページの改定とかが結構議題に上がっていたと思うが、以降改定した部分、今後改定する予定というのはあるか。

〈大橋主査〉

今のところ、事業所の方からご意見ご要望がないので、改定などはしていない。

システム上も今のところ変更はない。

ただ、前回の委員会で、年に1回は内容を事業所に照会した上で見直すとしたので、そういったことは今後検討したい。

〈小倉委員〉

取り組みの実施については、大丈夫だと思う。

先ほどの鈴木委員や千葉委員のお話、うちの子もたちの現状でいうと、コロナウイルスによって生活が変化を余儀なくされて、大体3年くらいになるが、うまく順応できないのが平常だった。

最初は慣れないマスクを着用しての生活で、人と交流することもできなくなって、学校なども急な変更とか、予定変更が苦手な子にとってはストレスでしかない状況で、連日のニュースで恐怖感を煽られ、出かけることも恐怖すら感じてしまう。今まではそういう状況だったと思う。

でも今は、屋外でマスクを外していいとか、学校行事もイベントも徐々に戻りつつあるが、やっぱり恐怖心があり、今までマスク生活が長かったせいで、そう簡単に戻れてないのが現状。大勢で集まるような行事なども数年間なかったのも、たくさんの人が集まる場所に行くと、うちの子の場合は過敏が強く出てしまったり、頭痛を起こしたりしている。

地域住民との相互理解や交流などの観点からは、もっとたくさん人と触れ合ってお互いのことを理解したり、交流したいという反面、コロナ禍での生活が人生で大きなウェイトを占める子供らにとって、簡単にはいかないな、時間がかかるなと感じている。

〈富樫委員〉

私も初めて出て、いろいろ勉強中だが、地域課題の、障がい者、障がい児、地域住民との相互理解ということで、いろいろな催しというのは非常に大事だと思う。

コロナ禍で2年やっていないが稚内市の福祉フェスタの中で、精神障がい者は心身障がい者の公共交通機関の割引がきかないところがあるので、精神障害者回復者クラブとして、精神障がい者の公共交通運賃の割引の署名活動をやったりして、一般住民も入ったようなイベントは非常に大事だなと思った。

〈伊藤委員〉 ※14:50頃出席

本日、遠足で外勤していた。我が子が支援が必要であったり、教師の立場でもあるので、この場でいろいろ勉強したいと思っている。

〈原田推進員〉

これで暮らしやすい地域づくり委員会の次第5までを終了する。

事務局にお返しして、(次第6の)その他の説明をしていただく。

〈大橋主査〉

最後に情報提供として、新型コロナウイルス感染症への感染が疑われる障がい者に対する合理的配慮の提供について、事務局から説明する。

これは、視覚に障がいのある方が新型コロナウイルスに感染して、自宅療養に非常に困難を伴った事例。配布できる資料がないため、口頭のみでの説明とする。

新型コロナウイルスに感染されたのは全盲の80代の方で、同居の配偶者とお子さんお人も全盲ということだった。

この方が、4月下旬に発熱して医療機関を受診し、抗原検査で陽性が判明、保健所の指示で、ご家族共々一定期間自宅療養ということになり、道としては平常の支援しかなかったため、その自宅療養に、非常に困難を伴った。

1つ目は、毎日、体温と血中酸素飽和度を測って保健所に連絡するのに、音声付き体温計はあったようだが、貸し出された血中酸素飽和度を測るパルスオキシメーターはそのような機能がないため、使用できなかったこと。

その上、音声付きでない機器は使用できないと伝えたにもかかわらず、再び、パルスオキシメーターが届いたこと。

2つ目は、ご家族の検査のことで、指定病院まで行く、検査キットを返送するのいずれかのところ、指定病院までは車で1時間ほどかかる距離で同行援護なしでは行くことができず検査キットを使うにも、ご家族だけでは、説明書を読むことも発送することもできないとい

うこと。

ご家族の検査は、その後、市町村内の医療機関で受けられるよう調整されたが、その連絡がうまくなされず数日かかってしまい、また、配偶者の方を病院に連れて行ったお子さんも全盲なので、大変苦勞されたそう。

3つ目は、道からお送りした日用品や食料品を詰めた「自宅療養セット」のことで、同じような形状のレトルト食品やカップ食品が何種類も入っており、触っただけでは分別ができなかったこと。

最終的には、地元の社会福祉協議会の方が防護服を着て訪問し、自宅療養セットを利用できるように仕分けた。

最初の発熱の4日後くらいに、北海道視覚障害者福祉連合会、略称：道視連を通して、これらのことが地元役場や道に伝えられ、適切な対応をするよう申し入れがあつてから、役場職員が窓の前まで行って、窓から手を出して血中酸素飽和度を測るなどの支援につながった。

この件を受けて、道の感染症対策課では、道視連に相談してご協力いただき、視覚に障がいのある方向けの対応を改善した。

1つ目は、自宅療養する方に配布するしおりを点字化したこと。

2つ目は、自宅療養セットの一覧を点字化、拡大文字化し、音声コードも掲載するようにしたこと。

点字を読める方は意外に少ないそうで、弱視の方は拡大文字がよいとのご意見を聞いて、拡大文字化し、それに加えて、アプリや福祉機器で読み取れるQRコードのようなコードを掲載して、内容を読み上げられるようにした。

3つ目は、触っても違いがわからない自宅療養セットに、商品名ラベルを点字で作って貼り付けるとのこと。

こちら道視連にご協力いただき、ラベル作成の委託を協議している。

4つ目は、視覚障がい者が使えるパルスオキシメーターの用意。

メーカーに確認したところ、視覚障がい者向けのものはないが、高齢者向けのものがあったので道で購入して、これも道視連にご協力いただき試しに使ってもらって、良い点、悪い点を確認し、視覚障がい者が使用するには、難ありだが使えなくもないということだった。

現在、運用方法を検討している。

個人情報をお伏せながらの話だが、その範囲で質問にお答えする

〈千葉委員〉

自分もいろいろ経験しており、パルスオキシメーターとか、食事、療養所の食事というのは、意外に委託業者が行っていると思う。

コロナの相談電話も道の職員ではなく、業務委託を受けている業者に伝わるケースがすごく多いような感じはしている。緊急時の対応というのは遅くなると思う。

例えば、道のコロナ相談ホームページの、事業者の方、一般の方、というような枠で、障がいをお持ちの方、というのもあったらやさしいなと考えている。

〈大橋主査〉

千葉委員に伺いたいが、コロナに感染した障がいのある人へ委託業者が対応していることで、具体的に何かあったか。

〈千葉委員〉

コロナの相談電話や食事を委託業者がやっていることで、緊急時の相談電話をしても障がい者の理解がされないケースがあるのではないかと感じて発言した。

〈内田委員〉

前回の国会で障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法という法律が

できた。

コロナも災害として捉えるのであれば、災害とか何かが起きた時、有事の情報伝達としての施策というのは推進されているけれど、情報伝達だけでなく、そこからの支援が大切だと思う。伝達するだけでなく、そこから支援が行きわたるかどうかが、生き死にを分けるのではないかと思っている。

地方、特に過疎地域は、買い物が不便な人は届ける買い物サービスを利用していたり、それで安否確認をしているところもある。そういったところと連携して、直接支援につなげられるような横の繋がりをしていったらいいのではないかと思うのが、まず1点。

起きた時に即応して対応できるような、医療でいうと、DMATという災害時にすぐ駆けつけてくれる医師団がいるように、福祉にも、東日本大震災や熊本の震災の時、障がいのある人たちが暮らしに困らないように、相談支援や直接支援を行うチームを編成していく事例があったと思う。

管内でも道全体でも、いわゆる有事や困っている時にすぐに対応できるようなチームを作りたいし、僕らとしてもそういった協力をしたい。事業所で直接支援に関わっている人たちはそういう思いでいる人が多いということをお伝えしておきたい。

(閉会)